令和元年度（2019 年度）事業報告

Ⅰ．事業の経過およびその成果

１．社員総会

第 72 回定時社員総会を 2019 年 5 月 22 日（水）に化学会館 7 階ホールで開催。社員総数 210 名のうち 184 名（出席者 21 名、有効委任状 163 名）が出席して会が成立。平成 30 年度決算（貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録）承認、理事・監事選任に関して決議した。また、平成 30 年度事業報告、平成 30 年度名誉会員推戴について報告が行われた。

２．役員会等

１）理事会

令和 1 年度は、第 644 回（5/7）、第 645 回（5/22）、第 646 回（7/22）、第 647 回（10/25）、第 648 回（2/5）の計 5 回開催するとともに、メール審議によるみなし理事会を 1 回行った。

①代表理事及び業務執行理事の選任

第 72 回定時社員総会（5/22）後の第 645 回理事会で、代表理事・筆頭副会長として石谷治氏、代表理事・常務理事として澤本光男氏を選出した。尚、代表理事・会長の川合眞紀氏は留任である。また、業務執行理事・副会長としては、留任である福田伸氏、八島栄次氏に加え、新たに加藤昌子氏、酒井一成氏、中村　聡氏を選出した。

②公益法人として内閣府へ定期提出書類の提出

平成 30 年度事業報告、平成 30 年度決算に係る資料について、第 644 回理事会で承認し、第 72 回定時社員総会でそれぞれ報告・決議後、5 月末に内閣府へ提出した。また、令和 1 年度理事について、第 643 回理事会で承認、第 72 回定時社員総会で決議後、第 645 回理事会で代表理事、業務執行理事の選任を行って、内閣府へ役員の変更届を提出した。

令和 2 年度事業計画及び予算について第 648 回理事会で承認し､2 月末に内閣府へ提出した。

③2020 年度(令和 2 年度)事業計画、予算案

2020 年度予算案については、第 646 回理事会において承認された「2020 年度予算作成方針」に基づき、部門長、委員長、部会長宛に策定を依頼し、第 1 次案を提出頂いた。

その後、事務局内で取り纏め、財務担当理事打ち合せ会(計 2 回)を経て第 648 回理事会にて最終承認された。2020 年度予算は、化学会館の改修工事に伴う費用、改修後の収益を可能な限り盛り込んだ為、約 94,907 千円の赤字となった。(昨年度予算より 56,473 千円の悪化)

2020 年度事業計画については、第 648 回理事会にて承認された。

④基本活動方針とその活動

定款に基づく化学会の中長期基本戦略、内外環境の変化、2019 年度(平成 31 年度)の基本活動方針の進捗状況を踏まえて作成された 2020 年度基本活動方針を第 648 回理事会で承認した。

ｉ．強化すべき活動領域：

１）グローバリゼーション（国際交流委員会を軸とした戦略の推進、年会の英語化と国際化の推進、ホスト学会としての PACIFICHEM2020 に向けた準備と本会議開催、国際周期表年 IYPT2019 の計画事業の実行と総括）

２）産学連携活動（産業界ニーズを捉えたイベント見直し、企画展開。CSJ 化学フェスタ持続的運営と更なる展開の検討）

３）ジャーナル改革とビジビリティ向上（ジャーナル見える化の徹底、新たな購読モデルの構築）

４）人材育成と教育普及活動（次世代化学人材育成に向けた活動、中高生からシニアまでのシームレスな活動推進、化学グランプリ・オリンピック事業の継続的な運営体制の構築）

ⅱ．150 周年に向けた改革

１）持続可能な化学会構築（各事業の規模最適化と見直し、化学会館の大規改修の着実な実行と運用）

２）研究交流活動進化（他学会・協会との交流深化と拡大、春季年会のあるべき姿の検討と第 101 春季年会における改革の実行）

ⅲ．化学会の組織基盤の強化

１）会員の維持・増強に向け組織的な取り組みの強化（組織的な会員維持・増強へ向け対応の検討と実行、法人会員の積極的支援依頼、広報・情報発信力強化）

２）事務局機能の強化（事務効率化(働き方改革への対応)、WEB 会議の普及推進、情報共有とﾀﾞｲﾅﾐｯｸで透明性の高い事務局、中核人材の育成推進）

３）財務体質の強化（更なる収益改善策の検討）

４）組織体制の見直し（委員会・支部の見直し及び部会自律的運営の推進）

⑤2020・2021 年度会長候補者及び役員候補者

2020・2021 年度会長候補者および理事候補者、監事候補者については、1/15 の役員候補者選考委員会を経て、第 648 回理事会で承認された。2020・2021 年度役員候補者については、5/25 の第 73 回定時社員総会に諮ることになった。

⑥重要な使用人としての支部長、部会長、事務局長の選任

第 648 回理事会において、2020 年度の支部長として、村上洋太氏、吉岡敏明氏、金井求氏、関根理香氏、秋吉一成氏、中島覚氏、氏家誠司氏、を選任した。また、部会長として、河合武司氏、氏、後藤雅宏氏、船津公人氏、伊東忍氏、赤染元浩氏を選任した。さらに事務局長として、鈴木慎一氏を選任した。

⑦各賞選考、フェロー選考、化学遺産認定

2019 年度フェロー候補者については、規則に従って選考し、第 647 回理事会で承認した。2019 年度の各賞候補者、化学遺産認定候補、吉野彰研究助成対象候補者については、2019 年度第 1 回みなし理事会で承認した。

⑧名誉会員の推戴

本会の名誉会員として藤田　誠（東大・教授）、平間正博氏（東北大・名誉教授）氏を推戴することを第 644 回理事会で、福住俊一氏（阪大・名誉教授）を第 647 回理事会で承認した。

⑨規程類の制定・改定

フェロー役割の付与追加に伴うフェロー規程の改定を第 644 回理事会で承認した。積立資産取扱い規程別紙について、文言統一の為、第 647 回理事会で改定承認した。文書管理規程

について第648回理事会で制定した。写真・動画の取扱について追加したプライバシーポリシーの改定を第648回理事会で承認した。ジャーナル購読の国内公共会員購読費取扱い改定に伴い、会員規程および学術情報部門規程の改定を第648回理事会で承認した。

なお、会務部門会議において、化学会館将来構想検討小委員会の廃止に伴う、戦略企画委員会の規則の改廃。女性化学者奨励賞選考委員会規則の改定。法人クレジットカード使用要領の制定、役員候補者選考要領を改定行った。

⑩国際交流関係

アジア国際シンポジウム Lectureship Award の受賞候補者 15 名を第 647 回理事会で承認した。Nakanishi Prize 受賞者 1 名について、第647回理事会で承認した。

第14回PCCP Prize受賞候補者を第648回理事会で承認した。原則受賞者は3名だが今回は特別に4名を受賞者とした。

第644回、第646回理事会において、IYPT2019事業に関連した、国際周期年記念シンポジウム、記念巡回展等の活動報告がなされた。

⑪会員関連

ジャーナル購読の国内公共会員の扱いに関して、これまでは会費として扱っているため、不課税であったが、今後は課税対象となる購読費に変更することの変更を行った。

⑫化学会館改修計画について

4／22 化学会館将来構想小委員会の決議内容に基づき①工事スケジュールに関して、②受注業者選定とフローに関して、③工事資金に関しての承認を行った。さらに1/24財務担当理事打合せ会での検討した結果により、自己資金を原資とすることを前提に、工事総額の2020年1月22日時点の見積総額を上限金額とすることを承認した。

２）顧問会

10月25日に3名の顧問（歴代会長）を招いて開催。顧問各位から貴重なご意見を伺った。

３）相談役会

2019年度も相談役会は開催しなかったが、平成30年度に続き、現役の社長、会長が出席する日化協の理事会、日化協理事懇親会、新年の化学合同賀詞交歓会などの場で、化学会幹部との意見交換を行った。このような化学企業トップとの意見交換の場を積極的に活用していく。

４）支部長・部会長会

2019年度は、3/16、7/22、2/5の3回開催した。支部・部会に関しては、基本活動方針、会員状況と会員増強取組、CSJ化学フェスタ、教育・普及活動（国際化学オリンピック日本大会2021、夢・化学－21、化学の日・化学週間）、PACIFICHEM2020、国際周期表年IYPT2019、ジャーナル戦略、化学会館の改修工事等についての情報共有と協力の要請を行った。また、2020年度の予算編成に際し、化学会館改修工事に伴う費用があり、これ以上の予算削減が難しい事から、今後は再来年度の事業内容を最適化し、収支改善を目指すことが共有された。各支部、部会より運営状況、課題、要望が出され、問題点を共有し議論を行った。

３．運営会議関係

１）運営会議

2019 年度は 4/22、6/17、9/27、12/13 の計 4 回開催。主に理事会における審議案件について予備的検討を行うとともに、会の重要事項について審議を行った。また、各委員会委員長、ディビジョン主査の選任、功労賞の選考を行った。

２）戦略企画委員会

2019 年度は 4/22、6/17、9/27、12/13 の計 4 回開催。平成 30 年度に引き続き、今年度についても、毎回原則 1 件の重要事項に関し、集中的に審議する場とし、以下のテーマについて討議を行った。

①今年度集中討議議題の検討

2019 年度の戦略企画委員会は、原則 1 会議 1 テーマに絞り集中討議を行うこととし、議題は以下の課題を議論することとした。

日　　程	議　　題
2019 年 6 月 17 日（月）	将来に向けた新しい事業（投資案件）の検討（会員減少、財務体質を考慮に入れ）
2019 年 9 月 27 日（金）	春季年会の在り方について（参加者減少への対応、支部大会、化学フェスタ等との関連性）
2019 年 12 月 13 日（金）	化学系学協会との協力体制について

②化学会館の改修について（会館将来構想検討小委員会活動

戦略企画委員会傘下に化学会館将来構想検討小委員会を設置し、スケジュール、設計・施工会社の選定、バランスプランの具体的検討、資金計画の検討を行った。工事業者選定後の設計等に関する詳細項目に関して検討を行うため、デザイン設計定例会議、総合定例会議を発足し、化学会館将来構想検討小委員会の構成員を総合定例会議に引き継ぎ検討することとした。

③将来に向けた新事業の検討

2019 年度の活動方針や現在の課題（会員数の推移、財政状況等）を踏まえ、今後の新事業に関する意見交換を行った。

・法人会員・企業個人正会員へ向けた取り組み
・法人会員へのサービス向上のための、Webinar の活用
・化学系学協会との連携
・春季年会、化学フェスタの検討
・教育会員へ向けた取り組みの充実

に関する議論が行われた。　特に、今回の議論を受け、年会対応、化学系学協会の連携に関しては次回以降の本会議の議題として継続して討議を行う。

④春季年会の在り方に関して

春季年会の最近の実績データを共有すると共に、参加者の減少傾向が続いていること、正

会員の参加比率が低いこと等の課題に対し、以下の項目について検討した。

ⅰ）現行の春季年会をもとにした改変型モデルの提案

ⅱ）大会運営支援システムの保守終了および第 101 春季年会からのシステム変更

ⅲ）戦略企画委員会傘下の「年会改革ワーキンググループ」設置

⑤化学系学協会との協力体制に関して

国内、海外における化学関連分野の学協会の現状に関する調査結果の共有を行い、今後の化学会の課題に関する自由討議を実施した。　化学会のディビジョンと専門学会との関係性、部会や支部の活動の在り方、等が議論された。　議論を継続し、「現時点で対応可能なことが何なのか」の選択肢を明確化し、将来的な方向性を検討すると共に、学協会会長が集まる場を設定し、情報交換を行い、今後の方向性を検討することとなった。

⑥ジャーナル戦略小委員会活動

「CSJ ジャーナルの現状（Impact Factor 等）、直近のトピックス」に関して共有が行われた。2018 年から情報発信力強化の第二期の科研費補助がスタートし、ジャーナル戦略委員会（企画委員会傘下の小委員会、委員長：黒田一幸氏）にて、さらなるジャーナル向上のための方策を議論している。国際的ビジビリティを向上させるためメール、SNS 等により論文情報を発信することで情報発信を強化している。2019 年度より冊子体を廃止し、完全に WEB 化をすることで、読者に対しての情報一元化が可能となり、より正確な読者動向解析が可能となった。解析を進めて読者のニーズを測り、より的確な読者マーケティングにより読者の増加を図る方針である。

⑦国際周期表年 IYPT2019 への対応に関して

戦略企画委員会の傘下に設置された IYPT 実行小委員会で IYPT2019 への日本化学会としての対応を協議し、以下の企画を実施した。

ⅰ）第 99 春季年会国際周期表年 2019 記念シンポジウム「自然も暮らしもすべて元素でできている」（3 月 17 日、日本物理学会第 74 回年次大会と二元同時中継方式）

ⅱ）私たちの元素―エッセイコンテスト（2 回）：中・高・大学生からのエッセイ募集

ⅲ）私たちの元素―産学からのメッセージ：大学、企業等からのメッセージ募集

ⅳ）巡回展：国際周期表年特別展（11 カ所）およびパネル展（7 ヶ所）

ⅴ）国際周期表年 2019 閉会式(12 月 5 日、東京)

３）広報委員会

広報委員会は日本化学会の情報発信力の強化を進めている。また日本化学会の活動についてアニュアルレポート発行、記者会見実施、ニュースリリース配布、ホームページへの新着情報アップを行っている。

令和元年度はアニュアルレポート 2019 発行、記者会見実施（2 回）、ニュースリリース配布（15 件）、ホームページへの新着情報アップ（131 件）を行った。

４）倫理委員会

今年度は『日本化学会会員行動規範』および『行動の指針』に係わる問題が特になく、倫

理委員会は開催しなかった。

5）論説委員会

論説委員会は日本化学会が専門家集団として、社会に向けてより積極的に発言するため、化学、化学技術関連の時事テーマを随時とりあげ、それに対する見解を機関誌「化学と工業」および化学会ホームページに「論説」として掲載し、発信している。

令和元年度には論説委員会を 2 回開催し、執筆を依頼するテーマについて論議し、論説委員およびゲスト論説委員に順次執筆を依頼、掲載した。なお、春季年会において「論説フォーラム」で大学の経営・就職革命をテーマに議論する予定である。

6）化学オリンピック支援委員会

化学オリンピック日本委員会の目的を継承し、化学に対する社会的関心を高めるとともに、化学分野の次世代人材の拡充と育成に寄与するために、国際化学オリンピック大会に関する国内および国際的活動を支援する。令和元年度は、国際化学オリンピック大会の日本代表候補者に対する訓練支援、日本代表の選抜・訓練に対する支援、国際化学オリンピック大会に対する国際的支援などを行った。

4．会務部門

1）会務部門会議

会務部門では、学会運営に係る規程・規則の整備、役員候補者の推薦、会員増強、表彰者の選考に関する業務を遂行することで、会員の増加推進や内部統制の充実に努めた。

規則の整備では、化学会館将来構想検討小委員会の廃止に伴う、戦略企画委員会の規則の改廃、ジャーナル購読の国内公共会員購読費取扱い改定に伴う、会員規程および学術情報部門規程の改定を理事会へ提案。会館改修に伴う文書ファイルの整理を進めるため、文書管理規程を新たに作成し、理事会へ提案した。フェロー制度については、これまで、その目的と役割が曖昧であったことから、「本会への助言」や「本会イベント及び委員会等への貢献」等、本会の発展に寄与するフェローの役割を定め、日本化学会フェロー規程改定について理事会へ提案した。その他に、法人クレジットカード使用要領の制定、委員長選出方法改定に伴う女性化学者奨励賞選考委員会規則の改定、投票立会人について現状運営と合わせるため、役員候補者選考要領の改定を行った。

なお、2019 年度日本化学会フェローとして、肆矢浩一氏(国學院高等学校・非常勤講師)を選考し、理事会への提案を行った。

2）会員委員会

今年度は委員会を 4 回開催した。化学会の会員数は依然として減少が続いており、会員増強のための方策や会員メリットについて、種々議論した。今年度は、法人正会員の会員増強を目指し、会員特典を簡潔にまとめたチラシを作成した。また退会・減口申請会員の慰留については、会長→トップ宛てのレター送付に一定の効果が見られる。個人会員については、代表正会員への会員増強依頼（春季年会での講演者増）をするなど、活動した。

第 99 春季年会会場（甲南大学　岡本キャンパス）で、代表正会員会議を開催した。

3）役員候補者選考委員会

1/15 に開催された役員候補者選考委員会において、2020 年度新任理事候補者 13 名と新任監事候補者 2 名を選出し、理事会に答申した。

４）各賞選考委員会

各賞選考委員会において、2019 年度受賞候補者を選出し、理事会に答申し、承認された。第 100 春季年会会場（東京理科大学野田キャンパス）で表彰式を執り行う予定である。

【日本化学会賞】６件

塩谷　光彦（東大院理）　杉本　直己（甲南大先端生命研）　野崎　京子（東大院工）
三浦　雅博（阪大院工）　村上　正浩（京大院工）　山下　正廣（東北大材料研）

【学術賞】９件

芥川　智行（東北大多元研）　安倍　学（広島大院理）　小島　隆彦（筑波大数理物質）
駒場　慎一（東理大理）　田中　克典（東工大院/理研）　平岡　秀一（東大院総合文化）
廣田　俊（奈良先端大）　宮坂　等（東北大金属研）　森　敦紀（神戸大先端膜研）

【進歩賞】８件

池本　晃喜（東大院理）　数間　恵弥子（理研）　木下　卓巳（東大院総合文化）
関　朋宏（北大院工）　田村　朋則（京大院工）　細野　暢彦（東大院新領域）
南　豪（東大生産研）　村上　慧（名大 ITbM）

【女性化学者奨励賞】２件

小阪田　泰子（阪大高等共創院）　若林　里衣（九大院工）

【化学技術賞】２件

西村佳史、近藤孝彦、河添慎也、池尻澄雄、野崎貴司／旭化成
青島敬之、亀尾広志、横山和之、金子清貴／三菱ケミカル、浦田尚男／三菱ケミカル HD

【技術進歩賞】

該当者なし

【化学教育賞】２件

多賀　圭次郎（名工大）　西原　寛（東大院理）

【化学教育有功賞】４件

神田　昌彦（青森県平川市立竹館小）　後藤　顕一（東洋大食環境）
富田　一茂（北海道旭川東高）　福満　晋（島根県立浜田高）

【化学技術有功賞】３件

近藤　聖彦（分子研）　鈴木　健吾（浜松ホトニクス）　山本　悠太（名大）

【功労賞】

受賞者なし

５．研究交流部門

１)研究交流部門会議

令和元年度は部門会議の開催は無し。

２）学術研究活性化委員会

令和元年度は会議を１回開催し、以下を検討した。

① 第二次先端ウオッチング調査

『第二次先端ウオッチング調査』は、複数の化学関連領域にインパクトを与え、新領域への発展が期待されるテーマについて調査を行っている。今年度は実施無し。

② 中長期テーマシンポジウム

現在の中長期テーマ6件とシンポジウム実施状況を確認した。本年度は6テーマで中長期テーマシンポジウムを第100春季年会にて実施することにした。実施予定の 6テーマは次の通り、１．生命科学における分子化学のプレゼンス、２．ナノシート：２次元構造を有する金属錯体の科学、３．人工光合成：どう反応を狙うか？、４．高度細胞機能を解析する分子動態計測と情報科学との融合、５．革新的触媒の創製：電気・光などを用いた触媒反応、６．次世代分子システムが拓く未来の化学

③ アジア国際シンポジウム

春季年会の活性化・国際化を目的として、アジア地域の若手研究者を招聘して国際シンポジウムを開催しており、第　100春季年会では9ディビジョン（(①物理化学②光化学③理論化学・情報化学・計算化学④無機化学⑤錯体化学・有機金属化学⑥電気化学⑦ナノテク・材料化学⑧コロイド・界面化学⑨有機結晶）による 7つのシンポジウムを開催予定である。

④ 年会の在り方について

年会の英語化・国際化について議論を行った。第99春季年会ではB講演で75%以上が英語による講演が実施され、徐々に年会の英語化が定着していること、特に、博士課程の学生やポスドクといった若い世代での英語化率は約90%と高いことが確認された。

３）ディビジョン運営委員会

令和元年度は会議を2回開催。第100春季年会でのアジア国際シンポジウム開催ディビジョン等について検討した。また、アジア国際シンポジウムの招聘研究者について、幅広い国・地域から招聘するため、年齢要件などについて見直す議論を引き続き行った。現在約19,560名の会員が21ディビジョンに登録している。

４）春季年会実行委員会

①第99春季年会（2019）

第99春季年会（実行委員長：近藤輝幸・京都大学大学院工学研究科教授）は3月16日(土)～19日(火)の4日間、甲南大学岡本キャンパス（兵庫県神戸市）で開催した。参加者数は7,038名（第98春季年会・日本大学、7,438名）、講演数は5,119件（同5,307件）であった。

②第100春季年会（2020）

第100春季年会（実行委員長：井手本康・東京理科大学理工学部教授）は2020年3月22日(日)～25日(水)に東京理科大学野田キャンパス（千葉県野田市）で開催する予定。

５）研究会・新領域研究グループ

①研究会

「フロンティア生命化学」、「低次元系光機能材料」、「分子アーキテクトニクス」の3つの研究会がシンポジウム等を実施した。

②新領域研究グループ

「「分子統計化学」の開拓～溶液とソフトマテリアルとの橋渡し」、「精密物質変換のための分子空間化学」、「サステイナブル・機能レドックス化学」、「液相高エネルギー化学の新展開」、「分散凝集の学理構築への科学と技術戦略」の5つのグループがシンポジウム等を実施した。

６）国際交流委員会

①環太平洋国際化学会議（PACIFICHEM）

2020 年に日本がホスト国として開催する第 8 回 PACIFICHEM に向け、国際組織委員会を中心に準備を進めている。2018、2019 年に 2 回のシンポジウム募集を行い、全 509 件を受領、最終的に 419 件（前回比 25%増）を採択した。このシンポジウム開催に伴い、1370 の半日セッションを「Pacifichem 2020: A Creative Vision for the Future」をテーマとし、12 月 15-20 日の会期中にホノルルで開催する。前回 2015 年の 16,500 件を超える講演数を目標とし、円滑な会議運営と日本からの参加促進を目指し、主催 7 か国(日・米・加・中・韓・豪・NZ)と協調して開催手続きを進める。本年夏に現地ホノルルで第 4 回組織委員会を開催予定。

②日英シンポジウム

2010 年 7 月に締結された『日英国際協力協定』に基づき、当会国際交流活動の一環として英国王立化学会と共同で、若手/中堅研究者を講演者として日英交互に毎年開催。今回初めて「バイオ関連化学シンポジウム」(9/7、於 東北大片平さくらホール）と連携して開催し、テーマ『生命を理解するための化学』の分野に特化した研究者間交流を行った。講演者は日英双方 5 名、計 10 名、このほかポスターセッションを 31 名で行い活発な意見交換や学術交流を行った。

③日台シンポジウム

国際活動の一環として、2018 年に台湾化学会 (Chemical Society Located in Taipei; CSLT) と二学会間の交流覚書 (MOU)を締結し、毎年交互に若手研究者を招聘して日台シンポジウムを開催。次世代を担う若手化学者による国際交流活性化と、トップレベルの化学者が深い議論を行うことを目的とし、今回は「Catalyst for Energy Conversion and Storage」をテーマとして春季年会で開催予定である。

④CS3 (Chemical Science and Societies Summit)

独、英、中、米、日の化学会および Funding Agency が連携して、喫緊のテーマに絞り、世界の第一線の化学者を集め会合を行なう。2009 年第 1 回ドイツでの開催以降、毎年いずれかの参加国がホストとなり開催していたが、2015 年以降は隔年開催で第 8 回目を 2019 年 11 月 11～13 日に RSC が主催でテーマを「Science to Enable Sustainable Plastics」(参加国：独、英、中、日）として開催した。次回開催 2021 年には日本が主催国となり、テーマ（案）は AI と Big Data の予定。

⑤FACS （アジア化学会連合）関係

FACS は太平洋・アジア地域に根付いた化学コミュニティとして 1978 年に設立され本会は 1981 年に加盟、現在の加盟国は 30 か国。FACS EXCO(役員会)が年 2 回開催され、今回は 2019 年 10 月 3 日(木)～5 日(土)に本会がホストとなり日本で開催した。なお、日本から選出する役員メンバーとして本会常務理事であり国際交流委員長である澤本光男教授が本会会長から指名され新たに就任した。なお、18ACC（第 18 回アジア化学会議）を 12 月 8～12 日で台湾にて開催し、次回 19ACC はトルコ・イスタンブールにて開催される予定。

⑥IUPAC （国際純正・応用化学連合）関係

IUPAC では 2018 年から賛助会員（Company Associate）の会費を 4 年間かけて段階的に大幅に値上げ($50→$1,500)することを IUPAC 理事会で決定した。本会では従前より日本円による独自の会費体系を導入しているが、今回の会費改定に関しても漸次移行の独自方針を決定し 2020 年までには IUPAC の設定する正規会費まで引き上げることとした。なお IUPAC は 2019 年に創立 100 周年を迎え、7 月にパリで開催された総会（General Assembly）には川合眞紀会

長が出席して祝辞を述べた。

⑦英国王立化学会との二国間協定更改（協定書署名）

2010 年 7 月に締結された『日英国際協力協定』は 5 年毎に更改されることとなっており、2020 年は二度目の更改となる。両国間の良好な協調関係を今後も維持し、この協定に基づき行われている日英シンポジウムや PCCP Prize など、双方の化学会が協力して科学の発展に貢献しうる学術活動を今後も連携して行う。

⑧命名法専門委員会

令和元年度は1回委員会を開催。『有機化学命名法―IUPAC2013 勧告および優先 IUPAC 名―』の正誤表作成について対応を行った。

⑨原子量専門委員会

2019 年版の「原子量表」を 2019 年化工誌・化教誌 4 月号に掲載した。また、2019 年度版の「原子量表」を作成した。2020 年化工誌・化教誌 4 月号に掲載予定。

⑩単位・記号専門委員会

「化学で使われる量・単位・記号」2019 年版を 2019 年化工誌・化教誌 4 月号に掲載した。また、2020 年版の更新を行った。2020 年化工誌・化教誌 4 月号に掲載予定。

⑪主催国際会議

(1)第 18 回新芳香族化学国際会議（ISNA-18）を本会主催で 2019 年 7 月 21-26 日、札幌コンベンションセンターにて開催（日本学術会議、基礎有機化学会と共同主催)、542 名の参加者中、中国/香港（32 名）や台湾(30 名)、韓国（29 名)、ドイツ(39 名)、アメリカ（25 名)、ポーランド(14 名)、イギリス(13 名)、カナダ(12 名)など 25 の国と地域から参加。次回 ISNA-19 は、2021 年ワルシャワ（ポーランド）にて開催予定。

(2)超分子化学アジア会議を化学会春季年会 100 回の記念事業として、また国際交流活動の一環として日本、中国、韓国の超分子分野のライジングスター各 5 名を招き、金沢大 WPI-NanoLSI と共同で超分子化学アジア会議を開催予定である。Organizer：生越 友樹氏（京大院工・金沢大 WPI-NanoLSI)、Co-organizer：秋根 茂久氏（金沢大 WPI-NanoLSI)、前田 勝浩氏（金沢大 WPI-NanoLSI)、Honorary Organizer：藤田 誠氏（東大院工)、八島 栄次氏（名大院工)。本シンポジウムを起点として、アジア各国の超分子分野のライジングスターが継続的に集結する機会となり、アジアにおける超分子化学の更なる発展を促すことを期待。

⑫PCCP 賞

Royal Society of Chemistry（RSC; 英国王立化学会）が発行する学術誌 PCCP（Physical Chemistry Chemical Physics）では"PCCP Prize"を設けており、RSC の協力依頼に応じ本会では 2007 年から毎年、数名の受賞候補者推薦を行い、春季年会会期中に RSC と合同で表彰式を行っている。2020 年は、原則受賞者は 3 名のところを特別に次の 4 名を受賞者とすることとした。(※敬称略）高野　慎二郎　（東大院理)、田邉　一郎　（阪大院理)、宮田　潔志　（九大院理)、森本　祐麻　（阪大院工）

７）化学遺産委員会

①化学・化学技術の分野で大きな業績を残された諸先達にインタビューを行い、それを映像と音声および冊子体で後世に残す事業[化学語り部・オーラルヒストリー]

令和元年度は冊子体を発行しなかった。

②化学・化学技術史に関する一般市民への啓発事業

第 13 回化学遺産市民公開講座を第 99 春季年会期間中の 3 月 17 日に、第 10 回認定の内容をテーマに実施した。

③「化学遺産認定制度」の実施

第 11 回化学遺産として以下の 4 件を認定した。第 100 春季年会表彰式で認定証を贈呈する予定。

〇認定化学遺産　第 051 号　タンパク質（チトクロム c, タカアミラーゼ A）の３次構造模型

〇認定化学遺産　第 052 号　日本の近代化学教育の礎を築いた舎密局の設計図（大阪開成所全図）

〇認定化学遺産　第 053 号　日本初の純国産「金属マグネシウムインゴット」

〇認定化学遺産　第 054 号　日本初の西洋医学処方による化粧品「美顔水」発売当時の容器 3 点

８）男女共同参画推進委員会

女性化学者奨励賞の候補者の選出を行った。第 20 回男女共同参画シンポジウム“働き方改革時代におけるプロモーションとマネジメント”を企画し、第 100 春季年会で開催予定。男女共同参画学協会連絡会に委員を派遣して活動を行った。

９）環境・安全推進委員会

傘下に安全小委員会および環境小委員会を設置し、「化学安全スクーリング」および「環境教育講演会」を実施した。また、日本学術会議主催の「安全工学シンポジウム」に対し、幹事学会として協力した。さらに、「環境工学連合講演会」に対し、共催学会としての窓口として協力した。

６．学術情報部門

１）学術情報部門会議

令和元年度は学術情報部門会議の開催は無し。

２）化工誌編集委員会

例年通り 2 回開催し、企画のアイディアや編集方針の打合せを行った。

①化工誌編集幹事会

委員会開催回数　：幹事会 12 回。

発行状況　：　総頁数　1,063 頁　　総発行部数　：　280,000 部

「化学と工業」誌の内容の充実を図るべく、幹事会を毎月開催し、各号の企画案およびライター記事について討議した。また、会員の興味を引く、最近の話題を提供する Chem×Story 欄を新設した。

②広告小委員会

委員会開催回数：　4 回

明報社とスプラウトの 2 社体制で「企業情報」、「企業情報」のウェブ版である「ケミカルリクルート」、「大学院入試案内」並びにタイアップ広告企画 Gallery の取り進めを行った。

３）欧文誌編集委員会

委員会開催回数　：　本委員会　1 回　、幹事会　2 回

発行状況　：　論文掲載　206 件、　総頁数　1,765 頁、　総発行部数　：　0 部
・2019 年 1 月号より完全電子化を実施。リニューアル済の Web サイトにユーザーを誘導して読者の動向解析を行い、さらなるビジビリティ向上策の検討に活かしている。
・片岡一則先生を Guest Editor として新たな Web 特集テーマ、「Life Chemistry」を立ち上げた。現在までに約 20 件ほどの Account/Review を掲載している。

4）速報誌編集委員会
委員会開催回数　：　本委員会　0 回、幹事会　1 回
発行状況　：　論文掲載　386 件、　総頁数　1,594 頁、　総発行部数　：0 部
・2019 年 1 月号より完全電子化を実施。リニューアル済の Web サイトにユーザーを誘導して読者の動向解析を行い、さらなるビジビリティ向上策の検討に活かしている。
・投稿の約 5 割を中国が占めていることから、中国に拠点を置いて、中国の著名な先生にリーダーに就任いただき、中国国内での PR を行っている。中国で著名な研究者の Review の獲得や中国からの投稿論文の質の向上を目的としている。
・国際会議や討論会において広告掲載やフライヤー配布を行い、PR を行っている。若手研究者に対してジャーナル賞（Chemistry Letters Young Researcher Award）の提供も行っており、若手研究者のエンカレッジをしている。

7．産学連携部門
1）産学連携部門会議
令和元年度は産学連携部門会議の開催なし。

2）産学交流委員会　（委員会開催回数 3 回）
産学交流委員会では、傘下に 4 小委員会を設置して産学連携事業を企画・実行するとともに、理事会および運営会議からの付託事項（次年度の産業界選出役員候補者の推薦、化学技術賞等の受賞候補者推薦など）への対応を行った。また、産学交流事業の内、特に人材交流の活性化について ATP セッション「シーズ共創プログラム ～産学連携 の新しいカタチ～」として実施している。

① ATP 企画小委員会　（委員会開催回数 3 回）
春季年会における産官学の学術交流および連携強化のための事業の企画・実施、および優秀講演賞（産業）の審査・選考を任務とする小委員会である。この小委員会から春季年会実行委員会傘下の ATP 小委員会に委員を派遣する形をとって、春季年会 ATP の企画・実施を担っている。甲南大学で開催された第 99 春季年会では、ATP セッション、ATP ポスター、ATP 交流会を実施した。ATP ポスター168 件のうち審査申請された 112 件から優秀講演賞（産業）の審査・選考を行い、受賞 7 件を決定した。東京理科大学で開催される第 100 春季年会でも ATP セッション、ATP ポスター、ATP 交流会を企画して準備を進めており、ATP ポスター申込み 163 件のうち審査申請された 101 件から審査・選考を行う予定である。

② 教育企画小委員会　（委員会開催回数 2 回）
産業界所属の研究者・技術者、および産業界を目指す学生の教育に関わる事業の企画・実施を役割とする委員会で、基礎技術力の向上を目的とする「化学技術基礎講座」を企画・実施している。令和元年度の実績は下表の通りである。本年度は半日の小講座を追加実施した(3 月 8 日)。

開催日	講座名	主査	参加者
3/8	いまさら聞けない有機発光材料の基礎	霜垣幸浩	26 名
6/27-28	高分子化学 －高分子の基礎から応用・加工まで－	中條善樹	29 名
7/25-26	電子部品・材料の物性化学 －最先端産業を支える電子・光学材料開発に必須の基礎をマスターしよう－	藤岡 洋	30 名
9/30-10/1	製品開発に必要な有機合成化学の基礎	岩澤伸治	25 名
11/13-14	高分子キャラクタリゼーション －複雑な構造もやり方一つでここまで分かる！入門から応用まで徹底講義－	田代孝二	30 名
12/2-3	知っておきたい化学プラントの基本原理、工業化プロセスの要諦を学ぶ －化学技術者のための化学工学－	霜垣幸浩	43 名

③ 懇話会企画小委員会 （委員会開催回数 2 回）

産学官の学術交流の場としての R&D 懇話会（個人会員 20 名、法人会員 21 社、本年度末時点）の企画・実施を任務とする。会員の研究会・勉強会として、トピックステーマでの講演と交流会から成る「R&D 懇話会定例会」を 6 回、最先端技術を半日で紹介する「技術開発フォーラム」を 1 回開催した。令和元年度の実績は下表の通りである。

開催日	講座名	参加者
4/5	マイクロプラスチック問題を考える	60 名
5/10	アンモニア関連技術の新提案	23 名
6/7	連続フロー精密合成技術の最前線	22 名
9/13	「化学」のデジタルトランスフォーメーション（DX）～IoT、AI、ビッグデータ活用によるイノベーションを目指して～	49 名
10/04	次世代電池の本命 ～全固体電池開発の今～	31 名
11/1	第 13 回 技術開発フォーラム：地球環境にやさしい材料～プラスチック問題を考える～	63 名
12/13	株式会社ダイセル イノベーション・パーク見学会	20 名

④ 人材交流小委員会 （委員会開催回数 3 回）

産学の人材交流に関わる事業の企画・実施を担当する。「就職交流会」は、大学の教員と企業の人事の交流を目的としたもので、懇親会や休憩室を設けるなど快適さを追及し、参加者の増加を図ったところ、35 大学、35 企業から合計 113 名の参加があった。学生会員に向けては、「キャリアパス相談セミナー」を春季年会会期中にランチョン形式にて実施、さらに 9 月 には「企業現場見学」を、日本ゼオン（神奈川）、ダイセル（兵庫）、花王（和歌山）、東ソー（東京）、三菱ケミカル（神奈川）の 5 社の協力を得て実施し、77 名の参加があった。また外部組織による化学技術者教育など人材教育に関わる活動（JABEE への委員派遣）へ協力し

⑤た協力委員制度

本会から配信する産学連携関連情報の社内周知を任務とする協力委員は、法人会員 230 社（本年度末時点）から推薦をいただいている。残りの法人会員（約 200 社）に対する推薦要請を引き続き継続していく必要がある。

３）化学フェスタ実行委員会　（委員会開催回数 5 回）

CSJ 化学フェスタは「産学官の交流深耕」と「化学の社会への発信」を趣旨として開催している。第 9 回 CSJ 化学フェスタは 10 月 15 日（火）～17 日（木）の 3 日間、東京・江戸川区のタワーホール船堀で開催し、2,832 名が参加した。全国から 1,031 名の応募があった「学生ポスター」や新企画を含む喫緊の技術課題について講演、論議する「テーマ企画」をはじめ、産学官の団体・機関が企画する「コラボレーション企画」、「産官学 R&D 紹介企画」など多彩なプログラムが行われ、産官学の交流を促進した。第 10 回 CSJ 化学フェスタは 2020 年 10 月 20 日（火）～22 日（木）の開催を予定し、産学官 80 名以上の実行委員会を編成、企画等の準備を進めている。

４）吉野彰研究助成委員会　（委員会開催回数 1 回）

平成 26 年度に発足した本委員会では、毎年異なるテーマを設定して公募を実施している。令和元年度の研究テーマは『低ポアソン比（負を含む）を有する弾性体に関する基礎研究』と決定し、公募を行った結果、3 件の応募を得た。候補者 3 名について吉野彰研究助成選考小委員会による厳正な選考・審査と吉野彰研究助成委員会での審議を経て、令和元年度の吉野彰研究助成金の交付対象者は「小椎尾謙（九州大学）」とすることを、理事会において承認、決定した。選考結果は『化学と工業 3 月号』ならびに日本化学会ホームページに掲載。

８．教育・普及部門

教育・普及部門は学校教育の充実、化学の普及、会誌「化学と教育」の一層の充実を活動の 3 本柱として、学校教育委員会、普及・交流委員会、化教誌編集委員会、化学グランプリ・オリンピック委員会の 4 委員会で構成されている。また日本化学会、化学工学会、日本化学工業協会、新化学技術推進協会と共同で 10 月 23 日を「化学の日」、10 月 23 日を含む一週間を「化学週間」と制定、化学の理解増進を図る活動に取り組んでいる。

平成 29 年度に地域における継続的な化学普及活動への取組みにおいて功績が認められる個人を表彰する「化学普及活動功労者表彰」を制定した。令和元年度は、各支部、教育・普及部門から推薦のあった 17 名を選定した。

１）学校教育委員会

大学入試問題検討小委員会、グリーン化学実験小委員会、化学用語検討小委員会、化学教育カリキュラム構築小委員会の 4 委員会で構成されている。

①大学入試問題検討小委員会

大学入試センターからの依頼により、令和元年の大学入試センター試験（化学）の検討・評価を行った。

②グリーン化学実験小委員会

環境にやさしく、すぐれた新しい実験の開発・普及をはかることを目的としている。令和元年度もマイクロスケール実験キットを用いて小学生向けおよび教員向けの化学実験教室を開催し、普及活動に取り組んだ。

③化学用語検討小委員会

化学用語検討小委員会では高等学校教育現場で問題となっている用語について教科書会社の協力を得ながら抽出し、望ましい用語、用い方について検討を進めた。令和元年度は、『量概念の高大接続』を「化学と教育」2019 年 7 号に掲載した。

④化学教育カリキュラム構築小委員会

大学教育に繋がる、国際的水準の高等学校カリキュラム案を作成することを目的としている。令和元年度は方針作成および組織体制の構築を行った。

２）普及・交流委員会

化学教育フォーラム企画小委員会、国際関係小委員会、化学だいすきクラブ小委員会、実験体験小委員会、クイズショー小委員会の 5 委員会で構成され、化学の普及活動を進めている。このほか「化学の日・化学週間」など化学の理解を目的にさまざまな社会と連携し、積極的な活動に取り組んでいる。

①化学教育フォーラム企画小委員会

春季年会で化学教育に関係するシンポジウムを開催している。令和元年度は第 100 春季年会中の第 27 回化学教育フォーラムで「観察、実験を位置づけた授業実践ができる教員の育成」をテーマに開催予定。

②国際関係小委員会

第 9 回 NICE（Network for Inter-Asia Chemistry Educators）（7 月 30 日～8 月 1 日・台湾）および IUPAC CCE ミーティング（7 月 8 日～9 日、フランス・パリ）に参加した。

③化学だいすきクラブ小委員会

化学だいすきクラブ小委員会では小学生・中学生をメンバーとする「化学だいすきクラブ」（会員約 2,000 名）向けに、「ニュースレター」を年 3 回編集・発行した。また化学の理解増進、化学だいすきクラブ会員および読者層を広げるため、夏のイベントを開催している。令和元年度は、活躍する化学見学ツアー＠相田化学工業、キミも化学者＠農工大、キッズサイエンス@日大、大学研究室への招待＠阪大 南方研究室、夏休み親子化学実験教室＠日立化成工業（3 回）、国際周期表年 2019 特別企画「周期表博士をめざそう！」を実施した。

④実験体験小委員会

科研費からの助成を活動資金として、保育園や小学校、科学館、公民館、博物館などで出前実験教室を行った。

⑤クイズショー小委員会

「夢・化学-21」委員会が主催している「夏休み子ども化学実験ショー2019」において「なぜナニ化学クイズショー」を開催した。

⑥その他の普及活動：「化学の日」、化学週間」

令和元年度は、「君たちの将来と化学の未来－東大で過ごす化学な週末」（10 月 26 日）、「化学の日子ども化学実験ショー2019」（10 月 19 日～20 日、神戸国際展示場）をはじめ各支部でも連携した活動を行った。この他、理研 DAY や大阪市立大学主催「高校化学グランドコンテスト」にも共催、協賛した。

３）化教誌編集委員会

編集幹事会、レーダー小委員会、講座小委員会、実験の広場小委員会、産学連携小委員会、投稿小委員会を適時開催し、「化学と教育」誌を年間 12 号編集・刊行している。各企画のほか最近の話題などを適時掲載するなど誌面の充実を図る一方、教育会員の拡大などによる読者の増加に取り組み、化学教育の質的向上に向けた改革を進めている。本誌のイメージ刷新のため表紙デザインを変更した。また、令和 2 年よりレーダー小委員会、講座小委員会、産学連携小委員会を統合し、新・講座小委員会を新設し、記事内容の連携を図った。

４）化学グランプリ・オリンピック委員会

化学グランプリ 2019 は 7 月 15 日、全国の 65 会場で一次選考試験を実施し、3,983 名が参加した。一次選考のなかから成績上位者 76 名が 8 月 19 日、20 日の 2 日間、工学院大学で実験試験をともなう二次選考に進み、大賞 5 名、金賞 15 名、銀賞 21 名、銅賞 35 名が決定した。

また 7 月 21 日～30 日にフランスで開催された第 51 回国際化学オリンピックにおいて日本

代表生徒は金 2、銀 2 と全員がメダルを獲得した。今大会には世界の 80 カ国・地域から 309 名の生徒が参加し、理論試験、実験試験で化学の知力を競ったほか、各国代表との国際交流、開催地の文化を見学、体験した。

第 52 回国際化学オリンピックトルコ大会（2020 年 7 月 6～15 日）には、化学グランプリ 2019 二次選考進出者から 19 名を代表候補に認定しており、合宿、選抜試験を経て最終的に 4 名の日本代表を決定、国際化学オリンピックに派遣する予定である。

９．支部事業

学術の振興を図る事業として、支部研究発表会、講演会などを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、環境安全講習会、中学・高校生のための化学講座、全国高校化学グランプリ、出前授業、化学クラブ研究発表会などを、７支部（北海道、東北、関東、東海、近畿、中国四国、九州）でそれぞれ実施した。

10．部会事業

コロイドおよび界面化学部会、ケモインフォマティクス（旧情報化学）部会、生体機能関連化学部会、バイオテクノロジー部会、有機結晶部会の５部会それぞれにおいて、学術の振興を図る事業として、討論会、シンポジウムなどを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、ニュースレターの発行、フォーラムの開催などを行った。

11．化学情報センター

化学会発行図書、IUPAC 関連資料、共催・協賛の要旨集、国際会議、化学史関連資料の収集・保管を中心に、化学会編集刊行物の化学会ウェブサイトでのお知らせ、文献複写依頼対応、センター訪問者の対応を行った。

12．収益事業（事務室賃貸）

現在の入居状況は次表のとおり、英国王立化学会、公益社団法人有機合成化学協会、一般社団法人情報処理学会、一般社団法人触媒学会、国際化学オリンピック日本委員会に事務室を貸与しており、事務室賃貸面積 555.03 ㎡すべてが貸与されている。

階数	入居団体名　（）内は㎡	備考
6 階	英国王立化学会　（61.22）	継続
5 階	公益社団法人有機合成化学協会　（61.22）	継続
4 階	一般社団法人情報処理学会　（341.84）	継続
3 階	一般社団法人触媒学会　（49.50）	継続
3 階	国際化学オリンピック日本委員会　（41.25）	継続

Ⅱ．会員の状況

会員種別	2019年 2月末	2019 年 度 中								2020年 2月末	年度内 増 減
		入会内訳			退会内訳				変更		
		新入会	復帰	入会計	退会	死亡	除籍	退会計	修正		
個人正会員	18,423	298	15	313	1,208	76	1,074	2,358	1,367	17,745	-678
学生会員	5,430	2,394	3	2,397	1,080	0	99	1,179	-1,467	5,181	-249
中高生会員	90	19	0	19	13	0	0	13	-24	72	-18
教育会員	1,597	59	0	59	108	0	65	173	121	1,604	7
名誉会員	78	0	0	0	0	4	0	4	3	77	-1
法人正会員	434	5	0	5	12	0	0	12	0	427	-7
公共会員	401	6	0	6	26	0	0	26	0	381	-20
賛助会員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	26,453	2,781	18	2,799	2,447	80	1,238	3,765	0	25,487	-966
法人口数	3,485									3,444	-41

Ⅲ．役員の状況

［2019 年 5 月 22 日就任時］

会　長　川合眞紀（分子研）
筆頭副会長　石谷　治（東工大理）　会務部門長，学術情報副部門長，戦略企画委員長
常務理事　澤本光男（中部大総工研）　国際交流委員長，財務担当，職員人事担当
副会長　加藤昌子（北大院理）　会務部門副部門長，研究交流副部門長，広報副委員長
酒井一成（DIC㈱）　産学連携副部門長，職員人事担当
中村　聡（東工大生命理工）　教育・普及部門長，財務担当
福田　伸（三井化学㈱）　産学連携部門長，財務担当
八島栄次（名大院工）　研究交流部門長，学術情報部門長，広報委員長
理　事　秋山隆彦（学習院大理）
五十嵐仁一（ＪＸリサーチ㈱）
石坂　昌司（広大院理）
石原一彰（名大院工）
及川英秋（北大院理）
岡部晃博（三井化学㈱）
小川周一郎（旭化成㈱）
小柳津研一（早大先進理工）
加藤　直（首都大）
工藤一秋（東大生産技研）
薩摩　篤（名大院工）
髙井和彦（岡大院自然）
飛田博実（東北大院理）
永島英夫（九大先導研）
野崎京子（東大院工）
林　高史（阪大院工）
林　俊典（東ソー・エイアイエイ㈱）
松原誠二郎（京大院工）
山内　薫（東大院理）
監　事　武馬吉則（花王㈱）
谷口　功（国立高専機構）
原田　明（阪大産業科学研）
山﨑勝義（広大院理）

Ⅳ．重要な契約の締結

特になし

Ⅴ．内部統制に関する事項

内部統制に関して、次の規程を整備し、法人運営を行っている。

（１）理事・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制に関する規程

・理事の職務規程：主として代表理事及び業務執行理事の職務に関する規程

・役員報酬規程：役員報酬等の支給基準に関する規程

・積立資産取扱い規程：寄附金を原資として設定する積立遺産の取扱い方法の規程

（２）理事の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制のための規程

・理事会運営規程：理事会の運営方法並びに代表理事及び業務執行理事等の職務の執行報告を理事及び監事が審議し、結果を議事録として残すこと等を定めた規程

・情報公開規程：情報公開対象の資料の種類、保管及び閲覧等に関する規程

（３）損失の危険の管理に関する規程その他の体制のための規程

・リスク管理規程：リスクを防止し損失の最小化を図るためのリスク管理に関する規程

（４）理事の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制に関する規程

・決裁規程：理事等の決裁に関する責任の範囲を明確化し、効率的な業務執行を図るための規程

・事務局職制規程：事務局の組織、職位及び指揮命令系統に関する規程

（５）監事の監査が実効的に行われることを確保するための体制のための規程

・監事の職務規程：監事の職務に関する規程

以上